

## 孤独なくしゃみとしての文学

『向井豊昭傑作集 飛ぶくしゃみ』

田中里尚

向井豊昭は、一九九六年、第十二回早稲田文学新人賞を六五歳で受賞した。新人としての年齢もさることながら、言語感覚が独特であったため、特異な作家として記憶されることになった。すなわち、方言を多用し、アイヌ語を織り交ぜ、音符の脇に付されたルビや擬声語を大胆に表題にする向井独特の記法に注目が集まったのである。本書は、こうした「マイナー」作家向井豊昭の文学的キャリア全体を俯瞰しながら、その闘争的側面に焦点を当てつつ編まれたアンソロジーである。

さて、本書の目次を読んで気づくのは、作品の表題から物語内容が推測できないことだ。特に晩年の二作品はその傾向が明瞭に表われる。評論風表題の「新説国境論」（二〇〇八）は語り手とその父母の三人がアイヌ語、津軽弁、南部弁談義を繰り広げつつ、ナンセンス過ぎりぎりの語り口で、言語が作る国境の解体を説いている。これが亡くなる十日前に口述筆記されたものだというから驚きだ。老いのもたらす諦念とはほど遠く、向井の語りは問題に対し青年のごとく真摯に向かう。また、「飛ぶくしゃみ」（二〇〇七）という表題も、それだけでは何のことかわからない。読み始めるのとすぐに、語り手のMのくしゃみの音が大きく、教え子達が一

喧嘩をしても笑わせるだけの力があるということが明らかになる。老いによって、この力が衰弱してきているのではないだろうか、という疑問から始まるこの小説は、Mがプロレタリア作家小熊秀雄の詩集「飛ぶ橋」に登場するアイヌ、イクバシユイと談判（チャランケ）するなかで、往年のくしゃみの力を取り戻すところで終わる。ここには、向井が《小説くしゃみ笑い》だとする創作観が表明されており、その根源には向井のアイヌ問題への怒りがあると示されているのである。

向井の《小説くしゃみ笑い》観は、文学が誰に届くかわからない意味不明の音声のような「孤独」なものという認識から生じている。この認識は、本書冒頭の「うた詠み」（一九六六）に読み取れるだろう。この作品は晩年の二作品に比べると、逆に老成した印象を与える。「K党」に属し、アイヌ差別解放運動を行なう教師である「ぼく」の理想は、組織の姿勢やアイヌの子供達の現実と打ち砕かれてしまう。しかし、自分の受ける傷よりも、アイヌの少女である英代の受けた傷の方が深く重いという事実、「ぼく」は戸惑う。さらに、そのような境遇の英代の体臭にふと欲情してしまい、自身の卑小さを自覚しさえする。運動に関わる自分の資質への懐疑。運動の理想と現実の乖離の自覚。問題は依然として残るといふ絶望。現実の複雑さを複雑なまま捉えるには「文学という孤独な——そう、孤独な作業によって語っていかなければならぬ」（本書、二四頁）という決意に至るのである。

文学への意志が強まる一方で、運動や教育の理想と現実の乖離の意識は強まるばかりであった。アイヌ詩人を祖父に持つ少女である「わっち」とその母である「わたし」、そして、詩人「漆田へ」と接続させる孤独で徒勞に満ちた試みを行っていたのであった。孤独の深まりは、逆に問題への怒りを増幅させていった。一九八四年に平岡篤頼のヌーヴォーロマン論に触発された向井は、小説を構成する日本語自体を前景化するような方法論を掴みとることになった。そこで初めて、向井は、孤独な営みである文学を、大きな「くしゃみ」のように現実を紹介しうる音声的行為と捉え、意味の内容の呪縛から解放され、圧倒的な若さに満ちた文体を獲得していくのである。事実、一九九六年の「BARBARA」、一九九七年の「まむし半島のビジン語」、二〇〇一年の「DOVADOVA」など、音声の言語化を企図するような表題が続く。さらに、内容には性欲表現がユーモアたっぷりに描かれるようになる。二〇〇二年の「エロちゃんのアートレポート」を経て、これら音声的言語の追究と昂進する性欲表現が結びついた傑作が「ヤパーベジ チセパーベコベ イタヤバイ」（二〇〇三）である。五七五調フォビアの少女の「わたし」が、社会主義老詩人の児玉花外と出会い、性交し、子供を産む物語であるが、二人が語り合うのは、大逆事件や、日本語の語調や韻律に関する批判的考察なのだ。少女は学校でいじめを受け引きこもる現代的存在であり、児玉老人は歴史上の人物である。時空間を飛び越える物語と、言語による言語の考察を融合させた本作品は、女という条件を解放として認識する少女の再生の物語でもあるだろう。向井がずっと抱えてきたアイヌ少女への負い目を溶解させ、《文学くしゃみ笑い》という向井文学の達成となったのである。本書は、文学という孤独で徒勞多き営みを最期まで快活に遂行した男の記録なのだ。

参吉」の業績を伝えようとする「ぼく」の三者の語りが交錯する「耳のない独唱」（一九六八）は、文化の外部にいる人間と内部に属する人間との溝を描いている。この二作品が書かれた時期に、向井は北海道の日高地方の小学校で教師をしていたが、一九七三年頃に運動の現場から離脱し、次いで、一九八七年には教員も辞して一家で東京へ移住してしまうのだ。この振る舞いをどう考えたらいいのか。私は、アイヌ文化の外部において日本語を用いて運動を行なうかぎり、逆に文化間の国境を広げてしまう、と向井が考えていたのではないかと推測する。それは「エスペラントという理想」（一九七四）で「アイヌ問題は、ひどくにぎやかに新聞をかざるようになった。その新聞は日本語の新聞であり、アイヌ問題は、だから日本語で語られていた。その日本語でアイヌを傷つけ、アイヌ語を砕いていったはずであったのに」（本書、一一八頁）と書かれていることから感じたことである。

運動の現場から離れるとともに、向井は小説に向き合い、日本語そのものへの考察を深めていく。その過程のなかで、人工言語であるエスペラントも独習した。それは、自然発生的言語を相対化するために必要な作業であったのではないだろうか。その成果は、ハンガリーのエスペラント作家ベンチク・ヴィルモシュ「ジャーネットの死」（一九七六）の翻訳に見られる。この作品は、女を救えずに非英雄的な死を遂げる男の物語である。ここには「うた詠み」や「耳のない独唱」と同じ、男の理想の卑小さ、という主題が反復されている。非英雄的な営みに耐えること。向井はあらゆる境界を壊そうとしながらも、運動の現場からの「逃亡」（本書、二四六頁）という、自らの非英雄的な弱さを認めた上で、創造を問題